

室井尚×吉岡洋 連続講座

哲学とアートのための

12の対話 — 「現代」を問う

テーマ **6** 人類が暴走

し始めている？



第6回 人類が暴走し始めている？

吉岡 洋 (進行 安藤泰彦)

安藤 それでは時間になりましたので、第6回「人類が暴走し始めている？」を始めたいと思います。今回で、12回の講座のうち半分を終えることとなります。まだ後半6回ありますので、ぜひこれからも来てください。いつものように前半吉岡さんの方から1時間ほどお話があつて、その後15分ほど休憩の後、質疑応答の時間を45分ほどとっております。全部で2時間ほどになりますけれども、最後までぜひお付き合いください。

それではいつものように吉岡さんと室井さんによるプレ講座映像の関連部分を最初に見てもらいます。今年3月12日、まだ室井さんがおられたときに収録した最後の対話です。その時はこの12回を文字通り室井さんとの対話という形で予定していました。今もきっとこの近くで聴いておられる感じがしますが、どういう顔で聞いておられるのか……。

吉岡 いや、もう文句言いたくてしょうがないという顔で、貧乏ゆすりしながらイライラしてるんじゃないかな(笑)。そう感じる。



<https://youtu.be/60l9SB4Ja7I?feature=shared&t=2116>

プレ講座 (2023.3.12) 記録映像 一第6回 人類が暴走し始めている？

吉岡 プレ講座では、今回のテーマ「人類が暴走し始めている？」というのはどういう趣旨で考えたのか、忘れてしまって結局わからなかったみたいですね。僕が提案したはずなのだけど、今思い出すと、2人でテーマを出し合っていくうちに、室井さんが何かもっとインパクトのあるタイトルが欲しいと言ってきたので、じゃあ「人類が暴走する」ってどう？ と言ったら「いいじゃない」って感じで決めたんですよ。

「人類が暴走する」ってどういうことか。映像の中では、そもそも文明そのものには暴走する本性があるんだ、みたいなこと言っていました。それは間違っていないんですけど、それがどういうことなのか、そのことをもう少し具体的に展開していこうと思ってます。

そもそも「暴走」って別に悪いことじゃないですよ。自分が暴走する主体である場合は、すごく興奮する魅力的な経験だと思うのです。それを制御するというかコントロールする側から見ると、暴走は困ったことなただけけれども、暴走それ自体はエネルギーの発露なので、それ自体には善悪はなく、それをどんな立場から見るかによって変わってくる、両面性を持っていると思います。

今回は「暴走」というテーマから、どんな予告の漫画が出てくるのだろうと楽しみにしてたら、やはり暴走族でした。暴走族と言えばやはりバイクですよ。室井さんはバツタ型のバイクに乗っ

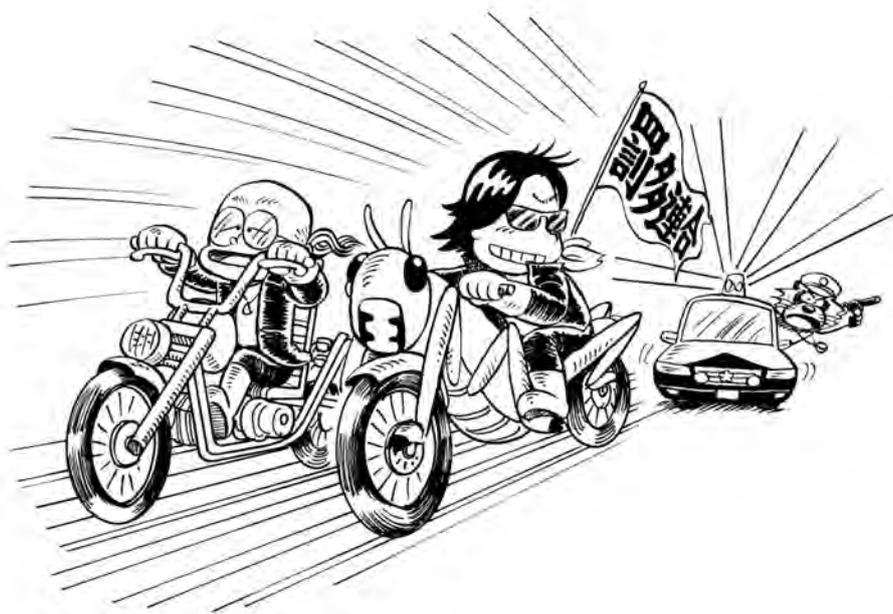
てて「罰多連合」っていう族のリーダーらしいね。僕はハーレーに乗ってて、ちょっと顔が薬物中毒みたいで危ない感じですが、そもそも二人ともヘルメットかぶってないから道路交通法違反です（笑）。いや、それよりタヌキが警官でパトカーで追いかけるのはいいのですが、交通違反を取り締まるだけなのに拳銃抜いてて、タヌキがいちばんアブないかもしれない。

暴走族って、90年代とかすごく話題になっていたような記憶があって、今もいるとは思いますが、それほど話題にならないですね。昔ほどムチャクチャをしなくなかったからかな。

大雑把な言い方ですがそもそも「暴走」というのは、何らかの機械的なシステム、メカニズムが、それをコントロールしようとする側から見ると、規則とか秩序とかいうものを無視して勝手に走り出し、制御が利かなくなるような状態のことですね。それを暴走と言います。

それではなぜ暴走が起こるかという、これは金属で造られた機械であっても、あるいはメカニズムとして見られた生き物の振る舞いであっても、共通の仕組みがあると思います。暴走とは何らかの「プラスのフィードバック」によって発生します。「フィードバック」という考え方は、機械であれ生き物であれ、それを入力と出力を持つシステムとして見ることから来ています。中身がどうなっているかはともかく、モノや情報の入力があって、それを何らかの仕方で加工して出力するシステムとしてみなすということです。フィードバックというのは、その出力されたエネルギーや信号が、もう一回システム自身の方に戻ってくる、これがフィードバックなんですよ。私たち人間を含む生き物は一般に、非常に複雑なフィードバックのメカニズムを持っていますね。私たちが日常行っているコミュニケーションもそうです。「フィードバック」という言葉で理解しているかどうかは別として。

例えば、今こういうふうに対面で僕が皆さんに話をしている場合、皆さんは黙っていて、僕だけが喋っているから、一方向的な情報の流れがあるかのように見えるけれども、絶対にそんなことはないんですね。たとえば今、皆さんがこの部屋から突然出ていくと、僕はもうしゃべれなくなります。情報の流れは一方向ではないのです。たとえ喋っていなくても、顔の表情であるとか、



イラスト／谷本研

視線であるとか、微妙なレベルのいろんな音とか、そういうことが僕が話していることによって変化して、それがもう一回僕の方に戻ってきて、それによって話し方や内容が変わるんですね。一見、そんなこと関係なだろうと思えるような反応が決定的なのです。

コロナ以降、オンラインでやりとりする文化がすごく広がりましたが、オンラインで授業したり話したりする時ってというのは、現実の対話状況に無意識に伴っていた、非常に複雑なフィードバックのループがかなり切断されてしまいます。しかしそれは多くの場合、無意識なんですよ。

例えば誰かが話をする、それを聞くということだけだと、機能としてそこだけに注目すれば、オンラインでもせいぜい顔とか上半身が見えていれば十分はずなんですよ。けれども実際にやってみるとリアルな対面状況とは全然違う。授業でも、オンラインにすると実際に教室で喋ってるのとはまったく違う話をしてしまいます。人にもよると思いますが、僕はオンラインで同じ講義なんてできません。

人に話をする時、この胸から下の身体というのは、別に重要じゃないはずなんですよ。けれどもそれを切り取ってみて初めてわかるのは、全身が見えている時と見えてない時とは、話の中身が全く違ってくるということです。同じ対面状況でも、例えば今このように畳の上に座って、お互いの全身が見えている状態で話すのと、会議室のような環境で机に向かってお互いにバストから上しか見えない状態で話すのとは、やはり話の内容が全然違ってくる。こういうのがフィードバックです。

たとえば室井さんを昔から知っている人は知ってると思いますけど、彼は話がつまらないとイライラして貧乏ゆすりをするんですね。だから、もう足の表情がものすごいメッセージを持っていて、学会なんかで人の話を聞いている時にそれを目撃すると、ああまた始まったなと思う。今はそれは見えないんですけど、最初に言ったように、していると感じます。これもひとつのフィードバックで、僕の話すことに影響してきます。

僕はまあ慣れてるんだけど、学会なんかで若い人が発表している目の前で、室井さんが一番前で貧乏ゆすりしながら聞いてると、つまらないんだなというメッセージを受け取る。それによって意気消沈する人もいるかもしれないけど、かえって反抗的なエネルギーが出てくる人もいる。生き物のフィードバックは複雑で、ある信号がネガティブに働くかポジティブに働くかということは単純に決定できない。それに比べると機械のフィードバックはシンプルです。フィードバックの意味が一意的に決まらないと機械を設計できないですからね。機械のフィードバックについては後で話します。

その前に「人類が暴走し始めている」という時の「人類」について。これは種としてのホモサピエンスのことではなくて、文明段階以降の人類という意味です。では「文明」とは何を指すか。現在私たちが生きている世界の基本的な仕組みを形作った出来事として、大きく二段階のターニングポイントが考えられると思います。

第一は約一万年前に始まったと考えられる新石器時代ですね。狩猟採取から農耕牧畜段階への移行です。新石器革命とか農業革命とか言われますが、「革命」といってもフランス革命みたいな急激な局所的変化じゃなく、地域差もあり何百年何千年に渡る変化ですから「革命」という言葉がふさわしいのかどうか分かりませんが、私たちが自明なものと思っている「所有」とか「権力」とか「国家」といった概念が発生しました。「戦争」もそこから始まりました。

もう一つはとても最近で、250年ぐらい前にイギリスから起こって世界中に広がった産業革命です。それによって私たちの生活は、機械的な環境に取り囲まれるようになりました。そのいちばん新しい形がコンピュータです。僕も含めて、生活の中にコンピュータが存在しなかった時代を経験した世代がまだ生きているので、劇的な変化として感じられると思いますが、物心ついた頃

からパソコンやネットが存在していた若い世代の人にとっては、自明の環境に思えることでしょう。

その前にはおそらく、化石燃料を用いた内燃機関が、世界を劇的に変化させました。石油で走る自動車は20世紀の象徴でしょうが、その前には石炭と蒸気機関の時代があります。この蒸気機関が産業革命のシンボルですね。蒸気機関は生物に比べたらとても単純なメカニズムですけれども、当時の人にとっては、燃料を「食べて」エネルギーを発生させるから、その点では生き物と同じ驚異的な機械だったわけです。生活の中にパソコンが登場した時の驚きが今の若い人には想像できないように、私たちは19世紀の人々が蒸気機関を目にして感じた驚異（脅威）を実感することはもはやできません。ちょうど現代の私たちが生成系人工知能を見ているような感じだと思います。

蒸気機関以前に人間が利用していた人力や畜力以外の動力は、風車や水車による自然力でした。東アジアよりもヨーロッパでそれらが必要だったのは、小麦を轆くためですね。米は精米して炊けば食べられるけど、小麦は硬いので轆かないと食べられない。でも風力や水力は不安定だし、そこから回転運動を得られる場所が限定されます。石炭などの採掘では地下水を汲み上げる必要がありますが、それには利用できないのでそれまでは人力で汲み上げていた。そんな大変な作業を機械に置き換えることができるのだから、すごいことでした。

ところが蒸気機関の回転する軸は物体ですから、速く回転させすぎると軸ブレが大きくなって効率が悪いし機械にも負荷がかかる。そこで回転の速さを最適に保つ必要があります。そのためには誰かが機械を観察し、回転が速すぎたら蒸気を送る弁を閉め、遅すぎたら開けるという作業をする必要がありますが、それを人間にやらせたら大変ですね。チャップリンの有名な映画『モダンタイムズ』に工場で手でレバーを操作させられているような場面がありますが、そんな感じですよ。

そこで考え出されたのが、ネガティブフィードバックを用いた自動制御です。これがサイバネティックスの原型です。サイバネティックスという言葉は、船の舵を取ることを意味するギリシア語から来てるものらしいですが、具体的にはこんな感じです。つまり回転の速さをギアによって小さな垂直の心棒に伝達し、それに水平方向に可動の錘を付けておきます。回転が速くなると遠心力で錘が回転軸から外に移動し、その動きによって蒸気を送る管の弁を閉めます。すると機関の出力は減少し心棒に伝わる回転速度も遅くなるので、今度は逆に錘は閉じて弁が開き、機関の回転速度は増します。つまり機械が速く作動すると、その出力が自動的に「もっと遅くせよ」という信号として戻ってくるということです。

サーモスタットなんかも同じ原理ですよ。あれの方が説明が簡単な。でも「サーモスタット」なんて言っても、これも若い人は知らないんじゃないでしょうか。昔は電気こたつとかの温度を一定に保つために、種類の違う金属を張り合わせてスイッチにするんですよ。すると、金属は種類によって熱による膨張率が違うので、貼り合わせた板が熱で反ったり戻ったりするわけです。それで、熱過ぎたらスイッチが切れ、冷えてきたらまた入るといった制御をしていました。

想像したら分かると思うけど、物理現象を用いたこういう制御だとネガティブフィードバックの信号が伝わるのに時間差があるから、コタツは熱くなったり冷たくなったりを繰り返すわけです。今はマイコンで制御しているので、若い人はそういう経験はないでしょう。

そういうのがマイナスのフィードバックですが、逆に「暴走」を惹き起こすプラスのフィードバックというのは、出力が大きくなるとさらに出力を大きくせよという信号が返ってくるような場合です。さっきの暴走族のような例は面白いですね。暴走族やったことある人がいるかどうか分かりませんが、自分の行為によって周囲の人々から苦情が出たり、パトカーが追いかけてきたりすると、そのことでさらに興奮は高まって、より暴走することになります。そもそも暴走行為というのは既存

の社会秩序に対する反逆心から行おうわけですから、規制や禁止の力が立ちはだかると暴走する動機は高まるからです。秩序側から見ると困るのですが、暴走している本人はすごい高揚感だと思います。

子供が泣いたりする時も似たようなことが起こりますね。かならずしも子供とは限りませんが、人間が絶望的な気持ちになって泣き始める時、自分が泣いているという自覚によって、さらに激しく号泣することになります。泣いているうちに、まるで泣くこと自体が目的のようになり、そもそも自分がなぜ泣いているのか忘れてたりするのですが……。大人になるとこれは滅多に経験しなくなります、人前で激しく泣くのはある意味気持ちいいことです。

暴走はプラスのフィードバックによって生み出されますが、一般に生き物の場合にはやがて自然な制御がかかります。暴走族も何日も走り続けるからできないし、子供も明日の朝まで泣き続けることはできない。それは物理的・生物的な限界があるからです。バッタの大発生も一種の暴走だと思いますが、バッタがどんどん増えて穀物の畑を食いつぶして、それは農家の人にとっては大損害だし、このままでは地球上がバッタばかりになるんじゃないかと思えるけど、そうはなりません。増えすぎるとやがて食べ物がなくなったり、自然的な制御がかかるから、生物の世界での暴走はいつかは収束します。

それに対して文明の世界では、そういった自然の制御が働かない場合があります。文明とは、言語や記号の活動を通して可能になるものですが、そこには直接の自然的・物理的制御がないんですね。たとえば、どんなに食いしん坊な美食家でも1日に10回ご馳走を食べるなんてできないですね。あるいは超人的なプレイボーイでも、100人の恋人と同時に付き合うことはできない。食欲とか性欲は身体に根ざしているの、どんなに欲望に惑わされても限界があるんです。

最近あまり言わなくなったけど、落語とか聴いてると、昔の男の道楽は「呑む・打つ・買う」とか言いますね。この中で「呑む」というのはお酒を飲むことで「買う」と言うのは女の人を買うことです。つまりは飲酒の欲望と性欲ですが、これはいずれも身体あつてのことなので、やっぱり限界があるんです。それに対して、おそらく道楽でいちばん危険なのは「打つ」でしょう。つまり博打、ギャンブルです。これは脳だけの活動なので、際限がないんですよ。記号的な行為だから、物理的・生物的なフィードバックが効かないんです。

さらに言えば、生物的な欲求も記号的に変換することができる。つまり、1日に10回美食をするのは不可能だけど、1日に10回美食をしようと思えばできるだけのお金を獲得することは可能なんです。100人の恋人と同時に付き合うのは無理だけど、100人の恋人と同時に付き合える資産を獲得することは可能なんです。つまりお金に換算するなら、欲望には際限がないんです。

そして、蓄財にはさらにプラスのフィードバックも働くんですよ。資産というのは、増えれば増えるほど、もっと増やさなきゃならなくなるんですよ。僕はそんな経験ないけどね(笑)。ここに集まっている人の中に超富裕層の人がいたら経験あるかもしれないけど、そんな人はここには来ないか(笑)。つまり、お金というのは持てば持つほど不安になり、もっと増やさないとけなくなるんですよ。

とにかく大きな資産はまず維持するだけでも不安でしょう。盗まれたら困るというのもあるけど、それ以前に管理が大変です。たしかセルバンテスだったかな、『ドン・キホーテ』を書いた16-17世紀のスペインの作家セルバンテスですけど、こんなことを言ってます。お金は少なすぎても多すぎても人間を煩わせる。でも、お金が少ないことによる煩いはある程度のお金を持てば解決できるけど、お金が多すぎる煩いに際限がない、みたいなことを書いています。つまり、お金はないよりもある方が大変だということです。

さすがはセルバンテスですね。お金のような記号に媒介される人間の欲望の本質を見抜いて

いる。お金というのは単にひとつの手がかりで、要するに生物の基本的欲求が抽象的な記号、シンボルに媒介された文明段階に移行すると、欲望に際限がなくなり、いくら獲得しても満足しなくなるということです。莫大な資産を持っている人ほど、それをどうやって維持し増やそうかということを経日必死に考えなければならなくなる。もし僕らが10億円あったらと想像すると、もうそれで死ぬまで楽に暮らせるから何もなくていいじゃないかと思うけど、もし本当にあったら大変なんです。

セルバンテスの時代はお金といっても金貨ですからね。貴金属の貨幣が大変なのは、泥棒も心配だけど、自分の家に置いておいても、自分がしょっちゅう管理するのは大変だから管理人を雇うことになる。その人がいつ持ち逃げするか分からないのです。現在は貨幣の主流は貴金属のようなモノではなく、紙幣とか銀行預金などの信用に基づく証明書、つまり認証された負債の記録という形をとっていますが、その価値は信用を支えているシステムに依存しているので、たくさん持っている人はやはり不安になります。インフレや恐慌が起こったらおしまいですから、どうやって自分の資産価値を維持しようかと悩む。

貨幣を含む記号的なシステムには自然的な歯止めが効かないということです。車の暴走が事故と表裏一体であるように、記号に媒介されたお金や権力の暴走は初めから破滅、カタストロフと表裏一体なのです。破滅の可能性が、記号に媒介された欲望を増幅していると思います。車を運転するというのはそれ自体が快楽だけれども、その快楽中にはどっかに交通事故による死の可能性みたいなものが含まれているということです。一時期室井さんと、ジャン・ボードリヤールというフランスの社会学者の消費社会論を夢中になって読んでいましたが、彼もそうした議論をしていました。

この背後にある、文明化された人類の欲望の相反する欲望の仕組みというのはそもそも何なのか。それをいちばん明確な形で言ったのは20世紀の初頭に登場したジークムント・フロイトという思想家だと思います。彼は、エロスとタナトスということをやったんですね。エロスというのは私たちが普通に言う愛とか欲望に近いもので、何か欲しい、手に入りにくいものほど欲しくなるような衝動です。かならずしも性愛的なものだけじゃなくて、知識とか、お金とか、権力とか、いろんな対象に結びついています。

エロスが向かうのは、それを獲得すれば自分はより強く大きくなると思われるもので、憧れの対象です。手の届かないところにあったり、障害があったりするんですね。エロティックなものというのはよく「禁断の……」と言われてたりするのはそのためです。目の前にあっていつでも手に入るようなものはエロティックじゃないですよ。

このエロスは比較的わかりやすいんですが、フロイトの概念で問題的とされてきたものがタナトス。これは自己破壊衝動、死の衝動です。破壊や死は誰も遠ざけたいものであるのに、なぜそれが欲望と結びつくのか。フロイトはこのエロスとタナトスというのが、コインの両面のようになら一体化していると言います。これはすごく面白い考え方だと思うのは今日のテーマの「暴走」ということに関して考える時です。暴走する側にとって暴走行為は気持ちがいい、エロティックな経験なのですが、それは破壊と死にも導くものでもある。一方で、秩序は常にその裏に暴走の可能性、暴走によるカタストロフの危険をはらんでいる。

文明はなぜ暴走しやすいのか。そもそも文明とは何をいうのかということですけども、私たちホモサピエンスはだいたい20万年ぐらい前にこの地上に登場した。人類は私たちだけじゃなくて、最初の頃はネアンデルタール人という別種の人類とも共存していたんです。でも彼らはいなくなっちゃって、人類は私たちだけになりました。ともかく20万年という長さは、地球の歴史から見たら一瞬だけれど、個人の人生からしたら気の遠くなるような長い時間ですよ。

でもその間に生物としての身体はそんなに変化してないらしいんです。京大で山際壽一さんと喋った時に聞いたのですが、ネアンデルタール人の子供を現代の小学校で教育しても我々と同じにはならないけど、ホモサピエンスであれば20万年前の赤ちゃんをタイムマシンで現代に連れてきて普通に育てたら、我々と全く区別できないと言うんですね。つまり脳を含めた身体の仕組みは、20万年ほとんど変化してないんです。変化しているように見えるけど、それは文明による後天的な影響だというんですね。

じゃあその文明による影響はいつ頃から始まるのか。これはもう、ほとんど20万年のうちの最近1万年ぐらいなんです。つまり農耕牧畜文明以降のことです。つまり新石器時代ですね。私たちが生きている文明の世界の基本は、新石器時代に決定された。その意味では、1万年くらいはずっと基本変わっていないとも言えます。そんなわけではないと思えるかもしれませんが。

これ（氷河から発見された5000年前のアイスマン、エッツィの写真）のことを、ちょっと話したかったんですよ。これを見たことのある人はいるでしょうか。1991年に世界中で話題になったミイラなんです。ミイラといっても古代エジプトのミイラじゃなくて、自然にできたミイラです。普通は人間の遺体は自然界の中では分解されて骨だけになったり、日本みたいな湿度の高いところだとミイラにならないですけれども、寒冷な環境とか乾燥している環境だと、自然にミイラができるんですね。これはどこかという、イタリアとオーストリアの国境に当たる、アルプスの氷河の中から出てきたんです。

氷河ってご覧になった方はいますかね。私たちが見るとじつ動かないように見えるんですけど、長い時間の間にはまるで河のように流れているんですよ。それで、その中にミイラ化されて残っていた昔の人間の遺体が出てきたりすることが、時々あるんですね。これはドイツ語でエッツタール、エッツの谷から出てきたのでエッツィと言う愛称で呼ばれたり、氷から出てきたからアイスマンとか呼ばれたりしています。

氷河から出てくるミイラは、大抵の場合は19世紀とか18世紀とか、すごい古いので17世紀とか、せいぜい数百年前のものだったんです。だからこれが出てきて警察が呼ばれた時にも、またそういうのが出てきたなって思われていた。何百年か前の人、たぶん商人とか旅人がアルプスを越えようとして遭難したのだらうと。ところが専門家が来て調べてみたら、これはなんと5000年前の遺体、つまり青銅器時代の人間だってことがわかったんですね。

このことを本で読んだ時に僕が面白いと思ったのは、5000年前の人間がミイラで発見されたということ自体も確かに驚くべきなことだけれども、それよりも、それを最初見た人たちが、その服装や持ち物を見ても19世紀の人間と区別がつかなかったということなんですよ。専門家が調べて初めて5000年前の男だって分かった。これは何を意味しているかという、つまり着ている服とか持ち物を見ても、それは基本的に5000年間変わっていないということです。現代人が想像すると、5000年前の人間なんて原始的な生活をしてるのだらうと想像するかもしれないけど、破れた服を修理するための携帯用ソーイングセットとか、薬草から作った胃腸薬とか、いろんな旅行アイテムを持って旅してるんですよ。それは基本、5000年変わってないのです。

逆に言うと、もしこれが20世紀後半以降の旅人だったら、素人でも見てすぐに分かりますね。化学繊維でできた服を着て、プラスチック製品とかトランジスタラジオを持っているからです。その意味では、新石器時代以来の文明の連続が、もしかすると20世紀あたりを境に次の段階に入りつつあるのかもしれない。

ただ、私たちが今生きている世界を新石器時代の延長として考えることには意味があると思います。農耕牧畜をすること、文字言語を使用すること、金属を精製して加工したり、それから運搬や移動に車輪を利用するというようなことが、基本的には変わっていないからです。たしか

に1万年前とか5000年前には、蒸気機関もガソリンエンジンも電気モーターもありません。だから現在私たちが利用しているような運搬具や交通機関に比べたら原始的に見えるかもしれないけれども、長い目で見たら、どんな動力源を発明するかよりも、車輪のない世界から車輪が存在する世界への移行こそ、極めて大きな飛躍なのではないでしょうか。車輪さえあれば、それを蒸気機関で動かそうが電気で動かそうが、そんなことは小さな変化じゃないかと思っただけです。だからこのエツィ、アイスマンというのは、文明というものを考える時にいつも思い出すんです。

これは余談ですが面白いエピソードもあります。このミイラが話題になった時、遺体が全身完全な状態で発見されたので、そこから精子を再生してもらうことはできるのかと問い合わせた女性がいるそうです。つまり男はいらんけど精子だけもらって子供が欲しいという人がね、どうせなら強い男の種が欲しい、現代の男は頼りないので(笑)、5000年前の男なら逞しい遺伝子を持っているのではないかと。残念ながら精子をもらうことは不可能だったようです。

それはまあ笑い話ですが、僕がこのミイラのことを知った時に感じたのは、1万年前から19世紀くらいまでというのはある意味連続している、極端な言い方をすると、我々はまだ新石器時代の最後を生きているのかもしれないということです。遺体が身につけているものを見ても、普通の人は19世紀の遭難者と区別がつかない。だから新石器革命というのが、暴走を可能にする文明の大きな飛躍だと思います。それに対して小さい方の飛躍は機械文明の誕生で、これは産業革命以降です。その後も核エネルギー利用とか、デジタル革命とかいろいろあるように見えます。私たちは大騒ぎしますが、それらは近くにあるので目立って見えるだけかもしれません。本当はあんまり大したことないんじゃないかとも思います。

しかしこの飛躍の大小は逆に考えることもできる。つまり5000年前の遺体は、19世紀のそれとは区別がつかないかもしれないけど、20世紀以降の遭難者とは誰でも区別がつくからです。つまり、石油化学工業、電子工学、情報テクノロジーといったものは、一万年の新石器時代が次の段階に移行する最初の兆しなのかもしれない。つまりその新しい段階においては、私たちが見ている現代科学文明の産物は、最初期の磨製石器のようなもので、石器がやがて精巧な道具へと変化していったように、現代の科学技術も一万年後には想像もできない洗練された姿へと変貌していると想像できます。もっともその時にはもう私たちの知っている「科学」ではなくなっている可能性もあります。

室井さんはよく他の分野の人と話をしたりする時に、歴史学者は数百年単位でしかものを見ないけれど、自分たち哲学者は千年一万年単位で見ているからなかなか話が噛み合わないみたいなことを言っていました。時間的に自分の近くにあるものは目立って見えすぎるので、それに迷わされてしまうんですね。

もう時間があまりなくなってきた。今回のテーマである「暴走」ということに対してどう向き合うかということのを改めて考えてみたい。僕は暴走というのは文明のパワーであって、それ自体が悪いわけじゃないと思うんですね。しかし放っておくわけにも行かない。ではどうやって暴走を制御するかということなんですが、この制御ということを考える時に二種類あると思います。

一つは外的な制御です。例えば暴走族を取り締まるために、法律とか警察とか、外にある力によって抑え込むということです。規則を作ったり、権力を行使したりすることによってコントロールする。学校の校則もそうですね。校則は法律ではないけど、子供の世界の外部から強制力を及ぼして秩序を維持するという点では、警察とか法的強制力と同じような力です。

そうしたものも場合によっては必要だと思うんですが、よりエレガントな制御の仕方もあります。それが複雑さという視点です。複雑さというのはたんに要素が多く混み合っているという意味ではなくて、全体を構成する要素が相互作用して、思いもかけない変化を全体にもたらすよう

なものことです。それが一方向への暴走に自動的にブレーキをかけたり他の方向へ導いたりすることがあるのですが、これは外部からの強制力ではなく、内在的な力なのです。

暴走というのは、いわば単一方向を持つ力が揃う、というようなことです。文明による人工物、たとえばエンジンを動かすための燃料の燃焼（爆発）もある種の暴走ですが、そこからは大きなエネルギーを取り出すことができます。それに対して、自然の世界はきわめて多方向の力によって出来上がっているのですよね。これは一見効率が悪いように見えるんです。色んな方向の力が同時にあると、力同士が相殺し合って全体としては動きが鈍いように見えるのですよね。

人間の世界も同じで、民主的な社会は多くの反対意見が戦わされるので、物事がなかなか決まりません。それでは、それを揃えていったらいいのか。外から強制力を及ぼして、みんなが同じ考え方をし、同じ方向を向いて進むような社会になった方がより良くなるのか。たしかにそうした独裁的な国家の方が一時的には大きなエネルギーを生み出すことができます。しかし同時にそれは非常に危険で、壊滅的な暴走も引き起こします。

この複雑さというものについて考えるために、今回の講座の資料に引用したのが『情報と生命』の中で室井さんが「カオス」について書いている箇所です。これを書いた頃には「複雑系」や「カオス理論」は大変流行していました。僕が'93年に書いた『〈思想〉の現在形』という本でも、サブタイトルに「複雑系」という言葉を入れてくれと編集者から強く言われました。そうすると売れるから、ということです。

こういう物理学や数学のトピックの流行って、結構ジャーナリズムと連動していたのですよね。だから「複雑系」とか「カオス」とか、よく分からないままに多くの人知っていた。まあたいていは何かしら最先端ですごいもの、というような理解に過ぎなかったのですが。それに対応するものは今なら何なのかな。やっぱりAIでしょうか。それが80年代から90年代にかけては「複雑系」と「カオス」で、その後は「ファジー」というのも流行ったね。

これはファジー集合論のファジーですね。ちゃんと理解しようとすると簡単ではないのですが、家電製品の謳い文句とかに書いてあるんですよ。洗濯機とか冷蔵庫とか、ファジー制御されていますって。意味分からないのに騒がれるとみんな、すごい、最先端だなんて思う。これは何かというと、つまり科学用語が呪文として機能しているということです。複雑系もそうで、何か新しいからすごいみたいだね。そういう流行とは関係なく、複雑系の科学というのは今も重要なものとして存在し続けている。にもかかわらず、もうジャーナリスティックに騒がれなくなると、一般の人たちは誰も知らない。

室井さんは科学者ではないから、カオスを数学的に正確に理解したいというよりは、我々にとっての文化の中でその意味を見いだしたい、そういう動機で書いたのが、このテキストだと思います。「最近カオスにはまっている」って書いてるけど、それは流行だからという意味ではないのですよね。そのきっかけになったのが、ジェームズ・グリックの『カオス』っていう本でした。当時はすごく売っていたけど、これ今、なかなか手に入れにくいんじゃないですかね。新潮文庫にはなっていないんですけど、図書館に行けば絶対あると思います。

それで、カオスって何かというと、普通の意味では単なる混沌、秩序のない状態をいう言葉ですね。秩序と混沌とは反対のものだし、秩序を保つように努力しないと、物事は混沌へと進んでいく。熱力学の第二法則は、この宇宙における無秩序さの度合い（エントロピー）は常に増大していくと教えます。日常的な経験でも、部屋は意識して片付けないと散らかっていきます。たしかに全体としての無秩序さは大域的には増加していくのですが、局所的にはそれとは反対に秩序が生まれるような現象も起こる。伝統的にはそれは生命というか有機的な世界だったんだけど、必ずしも狭い意味の生命でなくても、物理的現象それ自体がそうした秩序を生み出す力を持つ

ているというのが、カオスというテーマの面白い点だと思います。

非常にシンプルな数式が、それを何回も実行していくと予測できないような振る舞いをし始める。それが、コンピュータが使えるようになってよく分かるようになったのです。古典的な自然理解の中では秩序と混沌というのは対極のものだったんだけど、そうではないということです。混沌の中に秩序が潜んでいるということです。

時間ないけどローレンツアトラクターのイメージだけ見せますかね。これがカオス研究というか、複雑系科学のきっかけになったものです。エドワード・ローレンツというアメリカの気象学者が、コンピュータを使って気象のシミュレーションを研究していた時、あるシンプルな方程式に特定の初期値を与えると、それは予測できない振る舞いをし始める。それをカオスと呼んだのです。そしてこの現象は特殊なものではなくて、自然界の物理現象において極めて広範囲に存在していることが分かりました。

その特徴の一つが、初期値のわずかな変化に対する鋭敏性という性質で、これが「バタフライ効果」と呼ばれます。つまり、最初の値を少し変化させただけで全然違う解が出てくるんです。それは、初期値の変化が倍、そのまた倍というふうに指数関数的に増幅されることによって、大きな変化になっていくからです。バタバタフライ効果っていう言葉はうまいこと考えたなと思います。北京でちょうちょうが羽ばたくと、その時に生み出される風は気象学的には無視できる誤差にすぎないはずなのですが、それがカオスの過程に乗ると、いわばプラスのフィードバックによって倍々に増幅されて、気象の変化になるぐらいの大きさになることもありうる。つまり北京で蝶々が羽ばたくとニューヨークで嵐が来るみたいなイメージです。

北京で蝶々が羽ばたくとニューヨークに嵐が来るというのは、政治的な比喩としても面白いんですけども、そうした未来の予測不能性、初期の段階におけるほんの小さな変化が増幅されて、ものすごく大きな変化となって現れるようなことが、自然のプロセスの中には夥しく存在しているんだということが面白い。しかもそれはランダムな変化ではなくて一定の秩序を持っていて、その秩序は統計的なものではなく、決定論的に計算可能なものである。

カオスということで最後に紹介したいのは、京都大学の酒井敏さんという人が書いた『カオスなSDGs』という新書です。専門的なものではないですが、非常に重要な本だと思うんですね。SDGsは前にも話題になったので紹介しておきたいのです。前に、SDGsって何だかよく分からないけど、何だかある日突然上からそういう目標を押し付けられた、という印象を述べた人がいました。だから学校や会社では従わなければいけないんだけど、一方ネットとかを見ていると、SDGsなんていうのは世界を裏で支配している人たちの陰謀だ、みたいなものもある(笑)。

この本のスタンスで僕が共感できるのは、たしかにSDGsは優等生のきれいごとだけどね、陰謀だと全否定するほどのことでもなくて、適当に付き合っておけばいい、という態度です。別にわざわざ反対するものでもないないけども、やっぱりあまりにもそれが一方向的に、つまり複雑さを失ってベクトルをそろえるような、暴走的なやり方で使われるのは困る。誰もが絶対これに従いなさい、みたいな方向に持っていかれると、非常に危険なものになる。この本のサブタイトルに「ぐるっと回せばうんこ色」ってあるけど、これは僕は本当に気に入ったんですね。実は中身を読む前からこのサブタイトルを見て買ったんです。

これはどういうことかという、SDGsって「レインボー」じゃないですか。LGBTQもレインボーですよ(笑)。だいたい、表面的なきれいごとはレインボーなんです。でもそういうきれいな色を、否定するわけじゃなく混ぜていくと、茶色というか結局ウンコみたいな色になるでしょっていうことなんだと思います(笑)。ふざけているように聞こえるかもしれないけれども、ウンコの色というのは要するに土の色ですよ。さまざまな方向性を持った生命活動とか、物理的な活動が

集約され、蓄積していくと、そうした色に行き着くのです。

この本には複雑系科学やカオスのこともちゃんと書いてあるんですよ。たとえば真鍋淑郎さんという、ノーベル賞を取った気象学の研究者がいますよね。新聞とか週刊誌には、彼がノーベル賞を与えられたのは、地球温暖化を予測したからみたいを書いてある。これは真っ赤なウソなんです。真鍋さんの功績は、この本にはっきり書いてありますけれども、気象というものが基本的に複雑性を伴った現象であることを計算によって証明したからです。彼はスーパーコンピュータを用いて気象のシミュレーションを計算した。すると複数の解が出てくるのです。温暖化という解も出るけど、それとは異なる解も出る。多重解といって、解が一つじゃないんだよね。だから地球温暖化するかもしれないし、寒冷化するかもしれない。分からない。それが重要な発見なのです。

分からないことは分からないというのが誠実な科学者の態度なのに、それが新聞やマスコミを通して出てくると、真鍋さんは地球温暖化を証明したみたいなメッセージになってしまう。

複雑性ということに関してもうひとつ考えておきたいのは、ネットワークのことで。インターネットのことを想像してもらってもいい。ネットワークって複雑なものなんですよ。皆さんもSNSとか毎日見ている人が多いと思うんですけどね。たとえばツイッターでも何でもいいのですが、あ、今はエックスというのか、ともかくほとんどの人は数十人とか数百人をフォローしていて、また同じような数の人たちにフォローされていますね。しかし一方では、芸能人とか政治家みたいな有名人には、何万人もフォロワーがいるじゃないですか。つまり多くのSNSは少数の超有力なアカウントと、限られた繋がりしか持たない大量のアカウントで構成されています。

これではまるで階級社会みたいだから、もっと民主的なネットワーク、つまり平等にすべての人が同じ数のつながりを持っているようなシステムの方がいいんじゃないかと、何となく思ってしまう。つまり階級社会に対する共産主義みたいなものですね。みんなが同じような数のつながりを持っている方が、ネットワークとしても強力なのではないかと。でも違うのです。モデルを作って計算してみると、平等主義的なネットワークよりも、スケールフリーのネットワーク、つまり莫大な数のリンクを持った少数のメンバーと、少数のリンクしか持たない大量のメンバーが存在するネットワークの方が強靱なのです。

強靱というのはどういうことかという、たとえば外部から攻撃されてリンクを切られていくとします。すると、平等主義のシステムはちょっと切られただけでもある場所からある場所に行く経路がなくなってしまう、全体として機能が低下してしまう。つまりネットワークとして死んでいくんです。ところがスケールフリーのネットワークというのは、はるかに多くの経路が切断されても生きているんですよ。これは何を意味しているのか、興味深い問題だと思います。

私たちは同じ人間だから、理想的にはみんな平等がいいと何となく空想するのですが、すべての人が平等な社会というのは実は危ないんですよ。複雑性を失っていくからです。つまり、金持ちもいなければ貧乏人もいない、みんなが同じような財産や力を持っているような社会というのは、言葉ではキレイに聞こえるけど、実は複雑性のない、そして外部から簡単にコントロールされてしまう、非常にもろい社会なのです。複雑性を失ったものは脆いものなのだということが、そうしたことから考えられる。

文明が暴走しないために、規則とか力によって外部から抑え込むことも場合によっては必要だけれども、本質的な暴走に対してよりエレガントな制御をかけるやり方というのは、複雑性を担保することだと思うのです。それはいわば「正しい」目標に対して、それが「正しい」からというだけの理由で全員が賛成しないことです。というのも「正しさ」とはしばしば、一見正しそうに聞こえるだけで、私たちはよく考えもせず条件反射的に従っているだけかもしれないからです。

だから分からないものは分からないなりに、まあしょうがないから適当に付き合っただけの態度の方が健全だと思います。中には極端な意見の人もいていいけど、どっちつかずの人もたくさんいる、そういう本当の多様性を持つ集団の方が、変化に対して強靱ではないかと思います。

参加者との対話

発言者A こちらに伺うのは初めてで、本当に素人としての質問だと思うんですが、複雑性をキーワードとして考えてらっしゃるということなんですけれども、マスメディアとか見ると「複雑性」という言葉はもうあまり使われなくなっていて、その代わりに「多様性」という言葉が多く聞かれると思います。それは「複雑性」の言い換えとして捉えてもいいのでしょうか。

吉岡 重要なお質問をありがとうございます。たしかに「多様性」は頻繁に耳にする言葉ですね。本来の意味での多様性は重要なものだと考えます。けれどもそれは複雑性の言い換えだとは思いません。もし同じ意味だったら、言い換える必要はないわけですからね。何か別な意味を付加したいから言い換えが行われるのです。現在多くの文脈で使用される多様性という言葉は、「多様性が大切だ」と言われたら「いや、私は画一性の方が大事だと思う」などと反論することを許さない力を持っています。つまりそれは議論のためではなく、むしろ議論なしに相手に何かを強いる言葉なのです。そこには権力が最初からセットされています。

本来の意味の多様性ではないというのは、多様性、ダイバーシティといっても暗黙のうちに、あらかじめ許された範囲内での違いしか認めていないことで分かります。学校の美術の時間に「何描いてもいいよ」と画用紙を渡されて、ある子がそれに穴を開けたり、紙飛行機にして飛ばしたりしたら普通怒られるでしょう（怒らない先生は偉いと思います）。「多様性が大事だ」と言うなら、「多様性なんて無意味だ」という反対意見も多様な立場のひとつのはずなのに、それは認めない。本当の逸脱は認めず自分がコントロール可能なものだけを認める、それが「多様性」という言葉ですね。

昔岡本太郎さんが、どこかで言っていました、アーティストでもだんだん年取って偉くなってしまうと、審査員みたいな立場に立たされるでしょう。美術だからもちろん多様性や自由は建前上尊重しなければならない。でも口先では多様性がいいとか言っている、どこまで本当に逸脱したものを認めているか、というのは別なんです。若者がいろんな新しい試みをしてね、それに対して審査員として「うん、これはまだ荒削りだけれども、磨けばいいものになる」なんて思うものは、本当に多様でも新しいものでもない、岡本太郎は言う。本当に新しいものというのは、出てきた時に審査員の大人たちが「これだけはやめてくれ」というような試みの中から出てくる。年長者が「これだけはやめてくれ」と感じて拒絶するようなものの中に新しい時代の萌芽があるということです。それを認めるというか黙認するのが本来の多様性で、今の、あらかじめ暗黙に決められた範囲内で、いろいろあるよね、みたいなのは多様性でも何でもないと僕は思います。

さて多様性と近い関係にある複雑性という概念ですけど、複雑性が興味深いのはそれが人間の世界、人間の活動に対してだけ言われるのではなく、自然の世界と関わっているからだだと思います。複雑性という概念は、物理的世界に繋がっているところが魅力だと思います。ではそもそも複雑性とは何か？ たんに何か「複雑だ」といだけだと、何となく漠然としていますけれど、これは数理学の概念としても定義されているんですよ。まずは複雑であること（complex）を単に混みあってややこしいこと（complicated）と区別する必要があります。

何かが混み入っていることは、どんなに多くの要素から成り立っていたとしても、その一個ずつの要素を理解すれば、全体の振る舞いがそれらの総和として理解できるようなものことです。例えばパソコンとか、皆さんが持っているスマホとか、中を開けてみると——開けたらサポート

が受けられなくなったりしますが——細かな部品が密集しています。それら部品の働きは、素人には分からないけれども、一つ一つをちゃんと理解していけば、なぜスマホがこういう機能を果たすかということは理解できるんですよ。だからそれは単に「混みいつている」だけなんです。だから何か不具合が起きたら、その原因となっている部分を発見して修理することができます。全体が部分の和なのです。

それに対して複雑なシステムというのは、それを構成する部分を完全に理解しても、全体の振る舞いが予測できないのです。ようするに何が起こるか分からないということなのですが、これはある意味、人生の当たり前の実感にも通じるものですね。人生を基本的に予測可能で計画できるものとして見るか、予測不能な出来事や出会いで出来上がったものとして見るかで、かなり人生観は変わってくるのではないのでしょうか。ここでは、僕はむしろ複雑性の話をしたい。

私たちが活動している社会組織も、同じような異なった見方ができるのではないかと思います。一方には、部分の働きを理解したら全体がわかるっていう考え方もある。会社のある部署のチームが何人かいて、一人一人の能力を理解すると組織全体のパフォーマンスがわかる、という考え方もできます。けれども本当にうまくいつている組織ってというのは、メンバーの能力の和としては分からないことがあると思うんです。構成員の一人一人をどんなに理解しても、どうしてその組織がうまくいくか（あるいは逆にうまくいかないか）っていうことを理解できない。

これが“complexity”、つまり要素を理解しても全体の働きは分からないという意味と、もう一つは未来の挙動が予測できないということだと思います。「多様性」という言葉では、この意味はカバーできないのではないかな。現代用語としての「多様性」は、多様になる範囲があらかじめ決められているような概念だから。

つまり「多様性」というのは、カテゴリーが先にあって、あなたはそのどこに分類されますか？みたいな感じなんですね。よく虹の7色、レインボーカラーというのがそうした多様性のシンボルとして使われますが、虹を7色だと分類するのは特定の文化であって、本当の虹は色がいくつあるかではなくて、連続しているんですよ。レインボーはLGBTQのような運動のシンボルにもなっていますが、あれもあなたはトランスジェンダーだとか、分類されているじゃないですか。

けれども自然の生き物の性的現象、性的な行動というのは連続的な変異、グラデーションなんですよ。虹のスペクトルも本来は連続的につながってるんですね。それを無理やりいくつかの色に分類して、あなたはどれですか、私はこれですみたいな、結果としては人々を分断する道具になっている。

発言者B 今日の資料にフロイトの名前が出ていて、そこからちょっと思い出したのは、昔フロイトとアインシュタインが、文明にはなぜ戦争があるのかという対話をしている本がありました。文明にはいいところもある、悪いところもある、それでもいろんな人の意見が混じり合って複雑になっていく方がいいんだという風におっしゃったんですけども、ただフロイトの生きてた時代、あるいはその前のヨーロッパ文明は、そもそも何によって作られてたかと言いますと、開発途上国から資源を収奪することで成り立っている。そこら辺を、フロイトはどこまで理解していたのかということをおよそと疑問に思いました。

吉岡 今おっしゃったのは有名な本で、フロイトとアインシュタインの往復書簡ですよ（『ひとはなぜ戦争をするのか』、講談社学術文庫）。第1次世界大戦の後に、当時一番有名だった天才的物理学者として有名だったアインシュタインと、人間の心の世界の探究者としてのフロイトとを、この大問題で対話させようという企画ですね。分野も違う二人の天才に、人間はなぜ戦争

をするのか、戦争は防げるのか、抑止できるのかというようなことについて、手紙をやりとりさせたわけです。

で、フロイトの回答はどうだったかというと、僕の記憶では最終的にはお茶を濁したいという感じですね。フロイトはベシミストなんです。人間が戦争をやめるなんて無理だって思ってるんです。だけど天才アインシュタインに向かって、戦争廃棄なんて無理ですって言いにくいから。遠い未来にはそうなってるかな、みたいな感じで終わってる本なんですけども、面白いことはすごい面白いです。本日取り上げた死の衝動、「タナトス」というアイデアをフロイトが持ち始めた頃です。フロイトは西洋文明を成り立たせている搾取や収奪といった部分をどこまで意識していたのかということですけど、僕はかなり知ってたと思いますね。でも表立って主題化してはいない。フロイトは科学者で、基本的にはユニバーサルな視点で書いているので、そういった歴史的・政治的な不均衡について直接言及することはないんですよ。

今の御指摘は、フロイトとはちょっと離れるんですけども、私たちが歴史を理解する上できわめて重要な点に触れていると思います。さきほど産業革命の話をしましたけど、そうした歴史的变化をたんに技術革新による進歩だと考えている人が多いから。学校の世界史の時間に習って、そういう印象で残っている。僕も1970年代の高校で、世界史で習った時には、まるで人間の創意工夫の結果として機械文明が生じて、それが今につながっているという印象でした。

するとやはり西洋近代文明はすごいなっていう、素朴な印象を子供は持つんですけど、その後自分でいろいろ勉強してみた結果、なぜ産業革命のようなことが起こったのかというと、まさに今おっしゃったように、第三世界の搾取の結果です。奴隷貿易ですね。最初はポルトガル、次にフランスが持っていた奴隷売買の権利をイギリスが取得して、アフリカから奴隷を買うために武器や衣料品を売りつけてたんですよ。しかし銃も毛織物も売れなくなったので、インドから綿製品つまりキャラコを持って来て売っていた。しかしそれでは利益が出ないから、自国で安く生産できた方がいい。だが人件費の低いインドよりも安く生産するためには、機械化による生産性の向上が必要だったんです。

もちろん、産業革命のきっかけになった機械を作り出した発明家たちは、純粋な探究心に突き動かされていたのかもしれませんが。けれども彼らの発明品が歴史の表舞台に出て来るには、それを可能にする政治経済的必要性がバックにないと不可能です。別に18世紀のイギリス人が特に発明の才に恵まれていたわけではないと思います。しかし生産性の向上に結びつく発明や発見は、注目され特許も取れて莫大なお金にもなるし、競争的なイノベーションのための強い動機づけがあったのだと思います。

古代ギリシアやローマにも発明家はいたと思いますよ。でもそれは近代のように注目されない。単純労働を機械化できたとしても、同じことを奴隷を使ってもっと簡単にできるのなら、発明家なんて注目されません。でも発明品が国家レベルの利益に結びつくなら、ヒーローになれます。それは現在でも同じです。奴隷貿易がなかったら産業革命なんて起こらなかった、少なくとも私たちが今知っているような仕方では起こらなかったでしょう。

テクノロジーの歴史を考えると知るべきことは、人間の純粋な探究心とか、創意工夫の部分だけが美化されてしまうことです。「プロジェクトX」ですね。もちろん当事者たちにとっては純粋な探究心や創意工夫であったかもしれないけれど、その仕事が優れていたから自然に注目されたというわけではなくて、それらを歴史の表舞台に立たせるのは政治経済的な状況によるものです。

フロイトのような思想家がそうした歴史的側面に言及しなかったのは、時代的な制約でもあります。20世紀初頭の進歩的知識人というのは、100年後の私たちと同じ世界観でものを考えて

はいないのです。現代の私たちから見たら、西洋中心主義だし、人間中心主義だし、人種差別・女性差別的と思えるような側面もあります。人類の進歩をわりと素朴に信じているし、人類を種としてより優秀にしていくには、劣悪な遺伝子を意図的に排除すること、つまり優生学のような考え方を肯定していた人も多いです。今だと多くの人は「優生学＝ナチ」みたいな連想を持つけど、100年前の進歩的知識人は優生学に肯定的ですよ。

まあ現在の政治的適切性とかコンプライアンスとかいう点から判断したら、一世紀前の尊敬すべき思想家たちは結構ヤバいことをいっぱい言っています。でもそんなことを必要以上に指摘して、現代の方が彼らより意識が高いみたいに思うのは馬鹿げています。現代は何か過去の偉人たちについて、たとえば奴隷制を肯定していたからダメだみたいにその思想を全否定するような傾向が強くなってきましたが、これは歴史感覚を喪失した思想の劣化だと思います。過去の人々が私たちと違うのは当たり前なのであって、過去を理解するにはそこから出発しなければいけません。

発言者C こちらに直接参加させていただく一つの理由はですね、先生の言説に共感するところがあるからです。私も小中高大と色々な学校で授業をしてきて、社会全体の方向性とか目的性に対して、否定はしないですけども疑問点を口にする、若い人たちは目の前ではああ面白いですって言うってくれるんですけども、最近無記名の批判をしてもらうように紙に書いてもらうと、何人かとても苦しんでいる子たちがいることに気が付いたんですね。

ようするに自己肯定感を得たいのに、その自分たちの足を払われたように感じて苦しんでいる子たちがいるように感じたのです。今日ここ越させてもらったのは、若い人たちがいっぱいいますので、その若い人たちの正直なところをお聞きしたいなと。もちろん、じゃあお前自身は自由意志を自分で持てたのかって言われると、そうではないところがありますし、自由意志は難しい問題になると思うんですけども、その話に行く前に、できたら会場の若い方の正直な感想を聞きたい。それをお聞きして、もしなければそのことに関して先生のご意見をお聞きしたいんですけど。

吉岡 若い人たちが自己肯定感の足をすくわれるっていうのは、具体的には何によって？

発言者C いろんな場面があると思うんですけども、例えばAIの話をする時、オーグメンティッド・インテリジェンス（拡張知能）の話をするときに、現在のオーグメンティッド・インテリジェンスは上下を決めて上なり下なりに最適化していきますよね。そういう考え方、つまり何か目的を持って上下を決めるってことに対する、否定ではないんですけども疑問を投げかけると、若い人は何か、これが俺がやりたいことだと決めていて、これだけ進んだっていう自己肯定感を持って生きるための土台を揺るがされた、足をすくわれたように感じる人たちがいる気がしてるんですね。

吉岡 疑問を投げかけられただけで揺らいでしまうような自己肯定感というのは脆いものですね。そんな脆弱なものを守ってあげなければならないとすると、かえって心配になります。先日もここに来ていただいている埼玉大学の加藤有希子先生と、オンラインで「自己肯定感」について語る動画を配信したのですが、変な言い方ですがぼくは「自己肯定感」という言葉そのものが、本当の自己肯定とか自信を持つことにあまり役立っていないという気がするのです。こうした言葉で表現すること自体が、自己を肯定しにくくしているとか、ちゃんと生きられている人は、自己肯定なんてしないと思うんですよ。この言葉はいろんな新しい病名とかと一緒に、専門家とか心理学者が他人を観察して、現代の子供は自己肯定感が低い、というような分析をするため

の言葉で、テクニカルタームですね。だから私たちが自分のことを表現するために使う言葉じゃないと思います。

自信を持ちなさいと言うんじゃないで、自己肯定感を高めるべきだと言うと、何かこう中立的で客観的な感じがするのが、まあ現代的なのかもしれないけど、まさにそこがぼくは気に入らない、自分は使いたくないっていう感じがします。自分が子供や若者の時を思い出してみると、自己肯定感という言葉はなかったけど、その点から見るとめっちゃ低かったなって思います。でも自己肯定感はなかったけど、自信はあった。それは何かが出来たからとか客観的な指標によるものではなくて、もうヤケクソみたいな自信ですね。まあ思い込みと言えれば思い込みでしょう。でも自己肯定感みたいな客観的な用語がなかったせいで、そういう思い込みも許されていたのが救いだと思います。

自己肯定感と似たような感じがする現代用語として、承認欲求っていう言葉もありますね。何だか言葉の感じがよく似ている。承認欲求が満たされるというのは、要するに「いいね」の数とか動画の再生回数ですね。たしかに、数字だから「客観的」でしょう。そんなものに肯定されたり承認されたりしてたまるか、という気持ちがあります。そんなものでしか肯定・承認されないから、ますます自信がなくなっていくのではないのでしょうか。

数値じゃないとしたら何が大事なのですか？と聞かれた。ぼくは、人間が本当に自信を持っているのは、たくさんの人に支持されることではなく、自分が本当に尊敬している人から認められることだと思います。自動的に数値に還元されるネットの経験は、そうした本当の自信を持つ機会を邪魔しているような気がします。

そうしたことに関して考えているもうひとつのことは、本当は子供や若い人の問題ではないのではないか、ということです。本当はぼくのようなオジさん、オバさんの方がネット依存の問題は深刻ではないかと思う。若い人はデジタルネイティブとか言われて、物心ついた時からネット社会に適合しているから、ネットなしでは生きられないみたいに言われますが、そんなのウソだと思う。そういう記事を週刊誌とかテレビで扱うとウケるから言われているだけです。若い人は柔軟性があるので、ネットがなければ平気ですよ。でも年長者のネット依存は深刻で、あまり話題にならないから見えない。組織の上層部にいて意思決定とか、ある程度の権力を持つポジションにいる人たちですね。つまり企業の管理職とか官僚とか先生とかですね。ネット情報にマスメディアと同じように依存していて、数値的な承認を本気で信じていますが、話題にされない目立たないんです。彼らが子供や若者のネット依存を心配するのは、実は自分自身の不安を投影しているだけです。

90年代に携帯電話が普及していった時は、ケータイには若者文化という意味づけがあって、電車の中で電話している若者たちを大人は嘆かわしいと思ってみようような一時期がありました。けれども2000年代になって普及したスマホやタブレットは、完全に年齢は関係なくなっていますね。するとお金を持つ高齢のユーザーもマーケットとして大事だから、そこにもターゲットを絞って開発や販売戦略が立てられていると思います。たとえばアプリを立ち上げる時、技術的には瞬時に起動できるのに、それを早く使いたいというユーザーの欲求を最大化させるために、アプリ起動の待ち時間が意図的に操作されています。その値は子供や若者と高齢者では異なるはずですが、高齢者のユーザーを考慮して決められているような気がする。証拠はないんですけどね。

発言者D ありがとうございます。あの一質問ではなくて、ちょっと最初は感想からなんですけれども、暴走のメカニズムというところからお話が始まったのはとても興味深くて、その時ふと思っ

たのが、そもそも暴走というものをある程度起こすことでシステムを安定させるメカニズムがあるのではないかということです。たとえば人間の共同体の知恵として、一年に一度お祭りをするとかいうのは、それによってある程度の暴走を許して、高揚感とか、非日常的なものを実現することで共同体のバランスを取る、みたいなものがあつたというのを思いました。何かそういうものが、必ずしもお祭りでなくても、知恵としてもう少し日常的なゆるいこうつながりの中でもできるようになるといいのではないかな。

そのことと関連して、これはすごく個人的なお話であるんですけど、私の友人がですね、女性の方で40代でご結婚なさって、10年ぐらいお子さんができなかつたんですよ。それで何年間も不妊治療を続けてたんですけども、もうそろそろ年齢的にも仕方がないなと思ってた。ところがある年の夏に自分の実家に帰ってその地域のお祭りに参加したそうなんです。そうしたら、自分の中ですとんと何かがこう吹っ切れたみたいな感覚が生まれて、無事にご懐妊されたんですよ。とても不思議なことですが、何か複雑さがその人の中に起こり、身体の中にも起こって、生のシステム全体が大きく動いたという、そういう事例があるんだということをちょっと皆さんと共有したいなと思いました。

吉岡 それはよく分かります。お祭りに参加したから子供が出来たのかどうか、そういう単純な因果関係は分からないけど。でもお祭りのようなものの機能というのは、私たちが生きている日常を支えている価値観や秩序を一時的に転覆して、いわばある程度の暴走を許すことにあると思います。だからやっぱり、必要なものなのでしょうね。

今の話から思い出したのは、ぼくが毎年大晦日に出演している「生きづらジオ」というYouTube番組を運営している小野寺さんという人が、ある喫茶店を経営しているおばさんの話をしてくれたことです。その人は、喫茶店に来る見ず知らずの若い男女に、あなたたちもう少しお話ししてみたら、というようなことを言うと、その二人がその後しばらくして結婚したりするんだって。というか、そのお店に行くとそこで出会った人と何となく結婚したくなるような雰囲気がある(笑)、と。

これは面白いことだと思いました。というのも、現代の若者にとって結婚というのは大変なことで、子供ができたら育てられるのか、そのためには将来的に安定した収入がないととても踏み切れない、と考える。でも昔はあんまり先のことも考えずに、とりあえず世帯を持てば何とかかなると思って結婚する人も多かったのです。たぶんその喫茶店のおばさんには、過剰な心配を忘れさせるような力があるのではないのでしょうか。一度市役所から少子化対策のために講演してくださいと頼まれたそうですが、「私は何もしてないし言うこともない、ただうちに来た若い人たちがなぜか結婚する」と答えたそうです。つまりそうした雰囲気を作り出すのはその人の全人格的な魅力であって、こうすればいいというようにはマニュアル化できないということだと思います。

お祭りも同じで、お祭りのどんな側面がどんなふうに心や身体に影響を及ぼして妊娠しやすくなるのかはよく分からないのだけど、それまで何となく日常性の中で煮詰まって袋小路に入っていたような状況を、転覆させて突破するようなことが起こります。一方お祭りには暴走的で危険な側面もあるのだけど、それを排除してポジティブな変化だけをもたらす安心安全なものにしようとしても、なかなかうまくいかないと思う。裸になったり泥まみれになったり、一歩間違えると大怪我をしたり死んだりするようなこともあります。そうした暴走や危険と隣り合わせであることが重要なのだと思います。

と同時に、別に暴走や危険を伴わなくても、もっとユルい感じで日常性を少しずらすようなイベントもありますね。コロナで二、三年できなかつた地藏盆が今年は復活したようですが、あれもちょっ

とした非日常性を出現させる催しだと思います。子供にとっては、夏休みの最後の楽しみみたいなもので、地蔵盆が過ぎると夏休みの宿題を慌ててやらなければいけない。それまでに全部済ませてしまうお利口な子もいたけど。

あれって何のためにやるのか、と聞かれるとよく分からないですね。今は仏教的な行事という側面も薄くなったし、でも町内の担当の人たちはちゃんと準備してプログラムを決めたりするのですね。のど自慢大会をやったり、ゲームをやったり、おじさんたちはテントの中で夕方涼みながら外でビール飲んだり、子供には毎日何かお菓子くれたりするんだよね。お菓子を取りにいけなかった子には家まで配ってくれたりするんです。マンションとか新興住宅地でお地蔵さんがない地域には、レンタルで貸してくれるお寺もあるそうです。機能としてはお地蔵さんなんてなくても出来るイベントなんですけど、そういうサービスがあるということはやはりお地蔵さんは必要なんですね。ただそこにいただけなんですけどね。

発言者E すいません不慣れで上手く質問できるか分かんないんですけど、先ほど先生が平等がいいのかっていうお話をされていましたが、人種とかそういうことではある程度解決しつつあるかなと思って、でも私が一番今気にしてるのは男尊女卑、今の日本ではやっぱりそれが問題で、私はこの状態では不満です。でも私たちは生きていく上で男女平等を目指しても、また他の不平等を作ってしまうということなんですか。

吉岡 平等の権利とか数の上での平等は、意図的に作っていかないと実現できないと思います。大学や学会もそうだし、ぼくがまだ関わっている日本学術会議なんて内閣府の組織ですから、新しい会員を選んだり何かシンポジウムなどのイベントをすることに「ジェンダーバランス」ということをうるさく言われるのですが、現状では少ない女性会員の人と話す、女性だからという理由で参加させられるのも何だかなーという気分もあるんですね。ぼくも「ジェンダーバランス」という名の下に数だけ合わせればいいという考え方は、むしろ女性差別的な感じもします。

理想的には、大学なり研究者の世界で元々男女の比率が均等になって、そこから半数ずつ選ぶというのがいいのしょうけれど、そんなことが実現するまで待ってられないから、とりあえず特定のグループの男女比を調整するしかないと思います。けれどもそれは出発点であって、数を合わせたからそれで解決ということではないと思うのですよ。それにアート関係とか、分野によっては多くの女性が働いている領域もありますが、役員とか執行部は圧倒的に男性に偏っています。それは女性が上に昇りにくいような、暗黙の仕組みがあるからだと思います。それを温存しておいて、たまたま活躍している女性にスポットライトを当てて「女性活躍社会」なんて宣伝するのは本当に欺瞞的なことだと思う。

平等という観念に対してぼくが警戒感を持つのは、見かけだけ平等にすることで本当の不平等が隠されてしまうという点です。「平等」と「同じ」であることとは違うからです。男女の性差にしても、民族や人種間の差異にしても、生物学的にも文化的にもそれを消去して同じにすることはできません。しかし差異が存在すると言うと、平等主義に異を唱える差別主義者のレッテルを貼られます。つまり「平等」は、政治的な攻撃の手段に使われているのです。平等であることは理想ですが、その理想が政治的に利用されている。

前に話題になったSDGsと同じで、表面的にはいいことを言っているようなのだけど、目的は別のところにあるということも考えられます。女性や高齢者が活躍する社会、外国人にとって働きやすい環境を作るというのは、一見たしかに誰も反対できないお題目だけれども、そうした政策が本当にその人たちのためになっているのかというと、実は女性や高齢者や外国人を安い労

働力として市場に投入し、賃金の上昇を抑制する手段として使われている。そのことに異議を唱えると、お前は女性や高齢者や外国人を差別するのか、とポリコレ（政治的適切さ）によって攻撃されます。

歴史的にはついこの間まで、女性だけではなく男性も差別されていました。たとえば日本では、大正14年に男子普通選挙が実施されるまでは、納税額によって選挙権が決められていました。アメリカでは南北戦争後に、一部の黒人や移民にも選挙権が与えられるようになりましたが、そのように人種、移民、低所得の男性、そして女性へと参政権が拡大されてきたのは、理想主義の側から見るとマイノリティの権利拡張で喜ばしいことですが、為政者の現実主義から見ると、自分の党に投票する人々の数を確保するための手段です。そしてやはりそのことを指摘すると、差別主義者として攻撃されます。

平等は理想で、不平等は現実です。ぼくは現実に存在する不平等の中で、どう考えても不当なもの、人々の生きる力を奪っているものを改善すべきだと思います。しかし全員が平等になるような理想社会、共産主義社会のようなものに向かってみんな邁進すべきとは思いません。そういう煽りをかけてくるのは支配層だから、それに騙されて理想に向かっていくと、結局はより大きな不平等の中に陥る結果になると思います。そして先に言ったように、システム全体としては、すべてのメンバーが平等ではなくある程度の不平等というか差異が存在した方が、安定性は高いのです。だから平等と不平等の折り合いをつけることが重要で、単純な平等志向には警戒感を持つのです。

こうした話題は考えたことがないという人も多いし、考えたくないという気持ちの人もあるかもしれませんが、そうしたこともやっぱりもっと大っぴらに楽しくみんなで勉強する機会がある方がいいですね。本来は中学や高校の社会科がそういう場であることがいいのですが、日本の学校は明示的あるいは暗黙の制度でがんじがらめなので、先生にやる気や力があってもさせてくれません。学校の先生たちはもっと待遇も良くして自由にしてあげないといけないと思いますが、これもすぐには実現できないので、とりあえずはこの講座のような場がもっと増えた方がいいと思いますね。（拍手）

2023年9月16日(土) 於：京都芸術センター「大広間」